

## ユカギール語の現状と問題点

著者	遠藤 史
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	39
ページ	169-180
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001915">http://doi.org/10.15021/00001915</a>

## ユカギール語の現状と問題点

遠藤 史

- |                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| 1 はじめに           | 5 言語学的記述の還元           |
| 2 ユカギール語の現在の分布域  | 6 おわりに——現代社会の中のユカギール語 |
| 3 ユカギール語話者の人口と年齢 |                       |
| 4 ユカギール語の記述      |                       |

### 1 はじめに

ユカギール語 (Yukaghir, Yukagir, Jukagirskij jazyk) は、北東シベリアに住む少数民族ユカギール人によって話される言語である。政治的区分で見ると、その話される地域のほとんどはロシア連邦サハ共和国 (ヤクーチア) に入る。現在二つの言語ないし方言が話されており、一つはツンドラ・ユカギール人 (自称 wadul) によって話されているツンドラ・ユカギール語 (あるいはユカギール語ツンドラ方言)、もう一つはコリマ・ユカギール人 (自称 odul) によって話されているコリマ・ユカギール語 (あるいはユカギール語コリマ方言) である。現在話されているのはこの二つに過ぎないものの、1820年頃まではこの他に、より東の地域にチュワン語とオモク語が、より西の地域におそらくはヤナ語と呼ばれる同系統の言語が話されていたことが知られている。これらの言語は現在ではいずれも消滅したが、幸いなことにチュワン語とオモク語については僅かに記録が残されている。本稿では現在話されている二つをそれぞれ、ツンドラ・ユカギール語とコリマ・ユカギール語と表記することにするが、これらが独立した言語であるのか、それとも方言であるのかということにはまだ議論の余地がある。ただし、両者の間に日常的な交流が存在しないこと、両者の言語間での意思疎通は困難であると見られること、また両者を社会言語学的に包摂する「共通ユカギール語」のようなものが存在しないこと等からみて、両者をそれぞれ独立した言語として扱うことにはある程度の根拠があることを押さえておきたいと思う。

ユカギール語は、現在までの研究で見ると、系統的に孤立していると言わざるを得ない。ウラル語と同系であるという説が1940年代からしばしば主張され (Bouda, Collinder, Tailleur 等)、現在でもまだ追及されている (Nikolaeva 等) が、精緻な比較方法に立脚するウラル言語学側からの全体的な評価は必ずしも肯定的であるとは言えない。

## 2 ユカギール語の現在の分布域

現在ユカギール語は二つの、地理的に遠く隔たった地域に話されている。それぞれについて分布域をやや詳しく概観してみる：(1) ツンドラ・ユカギール語は、北極海に注ぐアラゼヤ川、チュコチャ川、そしてコリマ川の間低地ツンドラ地帯に話されており、話者の居住する中心地は、アラゼヤ川沿いのアンドリュースキノ村（1947年設立、人口約900人）である。またコリマ川沿いのチェルスキーやコリムスコエといった街にもある程度の人数の話者がまとまって住んでいる。(2) コリマ・ユカギール語は、コリマ川沿いの街ズイリヤンカ付近に注ぐ支流であるヤサーチナ川とその支流に沿ったタイガ地帯に話されている。話者の居住する中心地は、ヤサーチナ川沿いのネレムノエ村（1931年設立、1956～58年より下流の現在の場所に移動、人口約300人）である。なお旧ソ連の代表的なユカギール語研究者クレイノヴィチはその論文・著書の中で、たびたびコルコドン川（コリマ川の右岸支流のひとつ）沿いの地帯をコリマ・ユカギール語の分布域であると述べているが、ネレムノエ村で筆者が得た情報では、現在コルコドン川沿いには村がなく、したがって定住しているユカギール人はおそらくいないだろうとのことである。なおいうまでもなく、結婚・仕事などによる移住によってこれらの他の地域に住むことになったユカギール人もいる。たとえば長崎郁は、コリマ川のさらに上流、行政区分ではロシア連邦マガダン州のセイムチャン付近にもコリマ・ユカギール語の話者が住んでいることを確かめている（長崎 1998）。

以上に述べた両者の分布域は地理的に互いに遠く離れており、日常的な交流は全くないと言ってよい。両者が交流しようとすれば、それぞれの地域からサハ共和国（ヤクーチア）の首都ヤクーツクに飛行機などの交通機関を使って出てくるか、それともコリマ川沿いに移動することによるしかない。現在のところコリマ川沿いの定期船あるいは定期航空路は確保されていないので、後者の可能性は現実的にはかなり乏しいといわざるを得ない。

ツンドラ・ユカギール語の話者の中心的居住地アンドリュースキノ村とコリマ・ユカギール語の話者の中心的居住地ネレムノエ村はいずれも、旧ソ連のすすめた少数民族の定住化政策に基づいて建設された村である。注意すべきなのは、これらの村は必ずしもユカギール人だけが住んでいる村ではないということである。これらの村には同地域の他の少数民族であるエウエン人、ヤクート人、チュクチ人（アンドリュースキノ村のみ）などに加え、ロシア人も住んでいる。このような混住状況がユカギール語をめぐる社会言語学的状況をやや複雑なものにしている。

### 3 ユカギール語話者の人口と年齢

歴史的に見るとユカギール語は、話されている地域が次第に狭まり、それに伴って話者数は一貫して減少してきた。クレイノヴィチは、17世紀のユカギール人の分布地域は、北極海に注ぐインジギルカ川およびコリマ川地方を含め、西はヤナ川地方に及び、東はアナドゥイリ（アナディル）川地方に及んでいたと述べている（Krejnović 1990）。また、Jochelson（1926）や Levin and Potapov eds.（1956）の推定によれば、ユカギール語のかつての分布地域はさらに西のレナ川地方にまで及んでいたとされる。この頃のユカギール人の人口については池上（1989: 142f.）がドルギフ（B.O. Dolgix）の研究に基づいて推定した、17世紀半ばで4,775人（アナドゥイリ川地方のチュワン人を含めて）、同世紀終わりでも2,665人という数字が一つの参考となる。

社会言語学的な観点からより興味深いのはここ百年ほどのユカギール語をめぐる状況の変化である。ロシア帝国とソ連時代の統計から分かる範囲では、1897年にはユカギール人人口754人（うち話者数331人、母語保持率43.9%）であったのが、1959年にはユカギール人人口442人（うち話者数232人、母語保持率52.5%）と、おおむね20世紀前半の段階ではユカギール語話者はほぼ民族人口の約半分を占めていたのに対し、20世紀後半では一貫して割合の減少が進む。すなわち、1970年にはユカギール人人口615人（うち話者数288人、母語保持率46.8%）、1979年にはユカギール人人口800人（うち話者数300人、母語保持率37.5%）、1989年にはユカギール人人口1,100人（うち話者数360人、母語保持率32.8%）という状況である。ユカギール人自体の人口は増加しているものの、話者数は伸び悩み、結果として話者の割合の減少が起こっている。なおここでユカギール人というのはパスポートに「ユカギール人」と記載された人の数を指す。その数の増加はおそらくソ連時代に行われた少数民族への優遇措置を反映しているのではないと思われる。

宮岡（2002: 15）が検討しているブレンツィンガー（M. Brenzinger）による言語の危機度の評価基準の中に「全人口にしめる話者数の割合」（基準2）がある。それによると、この割合が30～79%であるのは「決定的な危機状態」（definitively endangered state）の指標の一つである。上記の統計に基づくならば、ユカギール語はおそらくは19世紀末にこの「決定的な危機状態」に入り、その状況から抜け出せないまま20世紀を過ごした。そして21世紀に向う時期、ユカギール語はより深刻な「厳しい危機状態」（severely endangered state）（上記の割合が10～30%であることが指標の一つ）に限りなく近づいてきた。

上記の統計はツンドラ・ユカギール人とコリマ・ユカギール人の区別を考慮していないので、統計からは言語ごとの話者数を知ることはできない。それらを推定するにはクレ

イノヴィチのあげた数字が一つの参考になるであろう。彼はツンドラ・ユカギール語の話者数が約200人、コリマ・ユカギール語の話者数が約50人という数字をあげている (Krejnovič 1990)。後者を仮にネレムノエ村の人口で割ってみるならば16.7%という数字が得られる。これはもちろん概算にすぎないのだが、コリマ・ユカギール語は上で言う「厳しい危機状態」にすでに入っている可能性があるといえる。言い換えれば、ともに厳しい状態にあるユカギール語のうちでも、とりわけコリマ・ユカギール語の方がより「危機に瀕している」可能性が高い。

以上に述べたことは1987年に行われたヴァフチンによる社会言語学的調査の結果によっても裏付けられると思われる (Vakhtin 1992)。旧ソ連時代の末に行われたこの社会言語学的調査は、ユカギール人の暮らすコミュニティのほぼ全体を対象に、今後再現が難しいと思われるほどの詳しい調査を行ったものであり、高い資料的価値を有すると言える。この論文の中でヴァフチンはユカギール人がどのような言語を話すかを調査し、各言語の話者の年齢構成を調べている (53-56)。その結果によると、アンドリューシキノ村のツンドラ・ユカギール人 (63人を対象に調査) については、ツンドラ・ユカギール語を第1言語とする話者の平均年齢は58歳、ヤクート語を第1言語とする話者の平均年齢は28歳、またロシア語を第1言語とする話者の平均年齢は24歳である。またネレムノエ村のコリマ・ユカギール人 (89人を対象に調査) については、コリマ・ユカギール語を第1言語とする話者の平均年齢は64歳、ヤクート語を第1言語とする話者の平均年齢は59歳、またロシア語を第1言語とする話者の平均年齢は28歳である。ロシア連邦全体での平均寿命 (男性59.8歳、女性72.2歳、1999年時) を考慮するなら、ネレムノエ村でコリマ・ユカギール語を第1言語として話す人の多くは、この段階でほぼこの年齢に達していることが分かる。この調査は今から15年前に行われたものなのだから、現在ではその人々の多くが平均寿命を決定的に超えていることは疑う余地がない。

筆者がネレムノエ村でのコリマ・ユカギール語の調査中に受けた印象も上記の結果を裏打ちするものである。コリマ・ユカギール語の流暢な話者を求めていくと、その下限は1930年代生まれまでであり、今のところ筆者はこれより若い世代の流暢な話者に出会えない。ネレムノエ村の中で若いコリマ・ユカギール人たちがコリマ・ユカギール語でやりとりをするのを筆者はいままで聞いたことがない (話したい願望がないという意味ではない)。老人同士が村の通りで出会った折にコリマ・ユカギール語で話すのを聞いたことはごく稀にあるが、若者たちの間ではロシア語で話すのが一般的なようである。

ヴァフチンの調査結果からは、この二つの村で各言語がどのようにせめぎあっているかも推測できる。まず年齢的に若くなるにつれてロシア語を第1言語として話すユカギール人の割合が確実に増えていることが両者に共通する。一方、両者のあいだで顕著

な相違が少なくとも2つある：(1) アンドリューシキノ村のツンドラ・ユカギール人はたとえ第1言語でなくとも、ある程度のユカギール語を使っている。たとえば被調査者の中に、使う言語としてツンドラ・ユカギール語をあげていないのは1人しかいない。これに対しネレムノエ村では、ロシア語のみを話すコリマ・ユカギール人がかなりの割合で、しかも若い世代に集中して現れている(41人、被調査者の46%、平均年齢19歳)。またロシア語とヤクート語のみ(どちらかが第1言語)を使うと答えた被調査者も少なくない(計19人、被調査者の21%)。(2) ヤクート語の活力はアンドリューシキノ村ではロシア語に拮抗している(話者の平均年齢が拮抗していることに注意)が、ネレムノエ村ではそれほどでもない。以上を要するならば、アンドリューシキノ村ではツンドラ・ユカギール語がヤクート語とロシア語に浸食されつつ瀬戸際で持ちこたえているのに対し、ネレムノエ村ではコリマ・ユカギール語がロシア語に直接、圧倒的な力で浸食されているという状況が見られるのではないだろうか。とはいえ、ロシア連邦の公用語であるロシア語とサハ共和国(ヤクーチア)の公用語であるヤクート語の双方に浸食されているという点では、ツンドラ・ユカギール語の方も楽観が許される状況ではない。

ヴァフチンの調査以後は、政治・経済的な混乱もあってこれほど詳しい統計はまだ現れていない。1993年に行われた北方少数民族問題研究所(ヤクーツク)によるアンケート調査結果によると、各地区に関して次のような数字が得られているのが参考になろう(Donskoj et al. 1996: 112-114)：(1) コリマ川上流地区(コリマ・ユカギール語の話されている地域)の233人のユカギール人のうち、36人が母語としてユカギール語に堪能であり、全くユカギール語を知らないのが129人、残りの60人は理解するが母語としては話せない。(2) コリマ川下流地区(ツンドラ・ユカギール語の話されている地域)の304人のユカギール人のうち、75人が母語としてユカギール語に堪能であり、まったく知らないのが169人、残りの60人は理解するが母語としては話せない。この結果から推定される母語保持率(「理解するが母語としては話せない」と答えた話者を除く)は、コリマ・ユカギール語が15.4%、ツンドラ・ユカギール語が24.7%である。数字の解釈の揺れはあるものの、この調査結果を信頼するならば、どうやら我々はどちらのユカギール語も共に上で言う「厳しい危機状態」(severely endangered state)に入ったという厳しい認識を持たざるを得ないようである。

#### 4 ユカギール語の記述

断片的な記録を別にすれば、ある程度体系的なユカギール語の記述は20世紀初頭から始まった。書誌事項を含むそれらの概観は遠藤(1993: 3-7)に述べられているので、ここではその後の展開を含めて簡潔に、ユカギール語の記述の発展を辿ってみることにし

たい。

19世紀末から20世紀初頭にかけてジェサップ北太平洋探検隊に参加したヨヘリソン (W. Jochelson) は精力的に民族学的調査を進めつつ、ユカギール語の習得にも努め、ユカギール語の資料も積極的に収集した。彼の大きな業績としては英語で書かれた包括的な民族誌 (Jochelson 1926) があり、言語学的資料としてその中に語彙集とテキスト集 (簡略な英語クロス付き) が見いだされる。またこの民族誌の記述の中に散見される民族言語学的語彙の記述も、伝統的な生活様式が失われつつある現在では得がたい資料である。ヨヘリソンはこれに先がけて、ユカギール語のテキスト集 (Jochelson 1900, ユカギール語のテキストにロシア語対訳付き) とコリマ・ユカギール語の概略的な文法記述 (Jochelson 1905, 英語; 1934年にロシア語訳) を発表している。前者はおよそ100篇にも及ぶユカギール語 (大部分はコリマ・ユカギール語, 一部ツンドラ・ユカギール語) のテキストであり、今からおよそ百年前のユカギール語の姿を垣間見ることができる貴重な資料である。

出発点においてこのような詳細な記述ないし記録を持つことができたのは、ユカギール語の研究にとっては幸運なことであったといえるのではないだろうか。とりわけそれらが多様な民族学的関心を持っていたヨヘルソンのような研究者によってなされたことは、その後のこの地域をめぐる政治的・社会的変転を知ってみれば僥倖であったとさえ言えると思われる。ヨヘルソンの民族誌に付された多くの写真を見るならば、この当時のユカギール人はまだそれほど多くの部分を近代文明に依存してはいなかったことが推察できる。このような時期にユカギール人との接触到成功したヨヘルソンは、ある意味では最後の機会を生かすことができたといつてよいかもしれない。残念なのは、彼が民族誌の語彙集の章で予告している「ユカギール語辞典」の出版が実現されなかったことである。おそらくはカードのままどこかに保管されていると思われるこの辞典の編纂と出版が今後期待される。

ソ連時代に入ってから、おそらくは政策的な配慮もあったと思われるが、ユカギール語の研究は組織的に育てられてきた印象を受ける。ソ連時代に活躍した代表的なユカギール語の研究者はクレイノヴィチ (E. A. Krejnovič) であり、彼は1936~37年および1959年の調査で得た資料を基に、ツンドラ・ユカギール語の包括的な文法 (Krejnovič 1958) や、ツンドラ、コリマ両方のユカギール語の文法について細部に踏み込んだ検討を含む文法研究 (Krejnovič 1982) を発表した。この2書をはじめとして個々の文法現象を検討する個別の論文に至るまでのクレイノヴィチの言語学的関心は幅広く、ユカギール語の研究はこの段階に至って言語学的な広がりを獲得したといえる。また、ヨヘリソンが詳しく扱うことができなかったツンドラ・ユカギール語のまとまった記述がクレイノヴィチによって初めてなされたことも重要である。残念なことはクレイノヴィチ

がその長い研究生活の間に収集したユカギール語のテキスト資料が生前にも、また現在に至るまでもほとんど刊行されていないことである。明らかに民話の一部と分かる例文が文法の説明のために多数引用されているので、おそらくその基となった民話のテキストは記録されているに違いない。また Krejnovič (1958) で初めて試みられたような、話者が自分の体験を語る内容の（伝統的な民話でない）テキストも、もし他に記録されているのなら今後出版される価値があるものだと言える。

クレイノヴィチ以後のソ連時代のユカギール語研究は、その中心地を次第にヤクーツクに移してきたといえるだろう。ユカギール人として初めてユカギール語研究の道に進んだクリロフ (G. N. Kurilov) は、自らの言語であるツンドラ・ユカギール語を扱った多数の研究を発表しているが、代表的なものは、ユカギール語としては初めての本格的な辞書となるツンドラ・ユカギール語=ロシア語辞典 (Kurilov 1990) である。ソ連崩壊後も、クリロフは北方少数民族問題研究所 (ヤクーツク) に所属して研究・教育両面に積極的に活動しており、現在でもユカギール関係のもっとも活動的な研究者である。彼の貢献はとりわけ教育面で大きい (5節および6節参照)。

コリマ・ユカギール語の側では、クリロフのような自民族の言語研究者は現れず、モスクワ等大都市の大学の研究者によって研究が進められた。ユカギール語の歴史研究をすすめていたモスクワ大学のニコラエヴァ (I. Nikolaeva) は、ヤクーツク大学の民族学研究者と協力してコリマ・ユカギール語の2冊組みのテキスト集を編纂した (Nikolaeva et al. eds. 1988; コリマ・ユカギール語原文とロシア語対訳)。このテキスト集とその後に行ったフィールドワークに基づいてレニングラード大学出身のマスロヴァ (E. Maslova) が文法研究を進め、その結果はやがてコリマ・ユカギール語の包括的な文法にまとめられる予定である。このように進んできた研究ではあるが、コリマ・ユカギール語の研究者が現在国外に出てしまっており、従来のような研究の流れは残念ながら現在止まった状態にある。

## 5 言語学的記述の還元

以上に概観したような民族学・言語学研究者によるユカギール語研究は、地域の不便さと研究者の少なさを考えれば、比較的「健闘」してきたほうだと言えるのではないかと思われる。少なくとも20世紀の間にユカギール語は記述の粗密はあれ、両言語について記述文法、テキスト資料、辞書あるいは語彙集などを有し、さらにウラル語との同系論の追求を含む若干の歴史研究も発展させてきたわけである。

しかしそれらの記述の蓄積も、残念なことに20世紀全般にわたったユカギール語の衰退を食い止めることはできなかった。これはもとよりユカギール語研究だけの責任に帰



せられることではなく、背景にはいくつかの社会的な要因も指摘できよう。まずソ連時代に進められた定住化政策を含む近代化政策によって狩猟・漁撈を中心とした伝統的な生業が衰退し、その伝統的生業とともに構築されていた文化もまた衰退してしまったことがあるだろう（事実、ヨヘリソンの記述したような文化の側面を現在ネレムノエ村で見るとは、不可能とは言えないまでも非常に困難である）。教育面では、定住化政策に伴って作られた学校教育のカリキュラムの中でユカギール語がほとんど無視されたこともあるだろう。個人的にはユカギール語の記録に尽力した教員も存在した（その記録したテキストはニコラエヴァの編纂したコリマ・ユカギール語のテキスト集の中に収められている）のだけれども、その努力は学校教育の中に有機的に組み入れられることはなかった。また、特にコリマ・ユカギール語の話される地域で顕著だと思われるが、地方の行政中心地であるズイリヤンカの街に近いために、近代文明があまりにも急速かつ大量に流入したこともあげられる。これらの要因に加えて、ユカギール人自体の人口がもともと非常に少ないために、ユカギール人自身によるコミュニティー（たとえば自治管区のような）が形成されなかったということもあるだろう。

以上の様々な要因にもかかわらず、ユカギール語研究が、記録されたものの地元への還元を十分に行ってこなかったという点は、指摘されざるを得ないと思われる。たとえばごく単純なロジスティクスの問題であるが、記述された資料が現地に届いておらず、結果として現地では見るできないということがある。たとえばネレムノエ村には民族の文化を展示しようとする小さな博物館が小学校の一角に設けられているが、そこにはコリマ・ユカギール語ないしユカギール文化の研究書は（ごく僅かの例外を除き）展示されていない。現在までに出版された研究書をここに並べるだけでもかなり印象的な展示になると思われるのだが、現物が村にないために展示ができないのである。また記述資料が英語で書かれているため、たとえコピーを持っていてもユカギール人自身がそれを読めないということもありうる。とりわけ残念なのはヨヘルソンの著した包括的な民族誌が英語で書かれているということである（ただし6節参照）。またたとえロシア語で書いてあっても、専門的な記述が続くために一般の人々には読みにくいということもある。クレイノヴィチの文法書などはこの例に当たるだろう。本来ならばこのような専門的な文法書と一般の人々の知識を媒介する教育的な配慮を持った文法が必要であるとは思われるのだが、現在までのところそのような文法が書かれる計画を筆者は知らない。

以上のような問題をはらみつつも最近では、ユカギール人自身が著作に参加し、また教育的な配慮をうかがわせるユカギール語の書物も散見されるようになり、前述したクリロフを中心に近年の大きな動きとなってきた。先鞭をつけたのはクリロフによるツンドラ・ユカギール語の小学校1年生用の教科書編纂である（Kurilov 1987）。ツンド

ラ・ユカギール語の側ではこれに続いて何冊かの出版がされたようであり、たとえば1990年にはクリロフの書いたツンドラ・ユカギール語の民話集が出版されている。コリマ・ユカギール語の側ではこれにやや遅れて、1993年に母語話者スピリドノフと言語学研究者ニコラエヴァの編集による小学校1年生用の教科書が出版され (Spiridonov and Nikolaeva 1993), それに続くように1995年に母語話者シャルーギン (V. Šalugin) が自ら書いたコリマ・ユカギール語の物語・エッセイ集が出版された。教科書の編纂者のスピリドノフはその後死去するが、彼が晩年大学ノートに書きためていたコリマ・ユカギール語の辞書草稿をもとに、1997年に学校用の語彙集 (分野別語彙集) が出版された。以上2冊の母語話者による出版には、ニコラエヴァの民話集で用いられたコリマ・ユカギール語の表記が (完全とは言えないが) 用いられている。表記上の若干の問題に関して遠藤 (2001) を参照されたい。

これらは言語学プロパーの著作というよりはむしろ、ユカギール語復興に向けた近年の動き (6節参照) の中から生まれてきたものであると言えよう。ただし、言語学プロパーの側からの協力が十分でないために、その意図した効果が十分発揮されていない場合もないとはいえない。たとえばスピリドノフのコリマ・ユカギール語語彙集では、語彙項目の選択が体系化されていないし、(より大きな問題点として) 形態音韻的交替などの文法的な情報が書き込まれていない。したがって、コリマ・ユカギール語をすでに十分知っている人々しか実際にはこの語彙集を活用することができない (そして、そういう人々にはこのような語彙集はもはや必要ない)。またクリロフの著作したツンドラ・ユカギール語の民話集にはロシア語の説明がないので、ユカギール語を知らない人が自分で学習するためには使えない。シャルーギンのコリマ・ユカギール語民話集にはロシア語の概略的な対訳はあるが、注が付されていないのでユカギール語の自習用としては使いにくい。以上のような諸問題は、もし言語学の側からのサポートが十分あったなら、おそらく何らかの対策を講ずることができたはずの事柄である。今後は言語学の側からも積極的なサポートを提供し、再版の機会などを捉えて可能な限り積極的に改訂を行っていくことが望ましいと思われる。

## 6 おわりに—現代社会の中のユカギール語

上に述べたように、北方少数民族問題研究所 (ヤクーツク) のクリロフが中心になって、1980年代からユカギール語の復興に向けた動きが少しずつ見られるようになってきている。最近の若干の動きを紹介して、結びに代えることにしたい。なお以下の記述において、Donskoj et al. (1996) の第9章を参考にした部分がある。

学校教育としては、上述のユカギール語教科書の出版と前後して、アンドリュースキ

ノ村とネレムノエ村の両方で、ユカギール語の授業が開始され、すでに何年もが経過している。アンドリュウシキノ村では1～11学年までユカギール語が必修とされ、ネレムノエ村では1～8学年まではユカギール語が必修、それ以後は随意科目として学ばれている。現在これらの村の学校ではユカギール語とユカギール文化に加えて、他の少数民族の言語と文化も教育し始めている。たとえばネレムノエ村の中等学校レベルでは「シベリア先住民族の文学」などの科目において、民話と詩だけではなく、歌や踊りなどを学ぶことができるという。一見順調に進んでいるユカギール語の教育ではあるが、先にも述べたようにこれらの村はいくつかの民族が混住する状況にあるため、実際には村でユカギール人以外の子どもにユカギール語の教育が行われる状況も生じうる。この状況をめぐって現地で賛否両論があるという印象を筆者は持っている。

直接目に見える形での文化の展示も行われるようになってきている。ネレムノエ村には小さいものではあるが、民具などの物質文化を展示する博物館が設置されている（1975年開館）。アンドリュウシキノ村には展示室（1979年開館）と村の図書館がある。すでに述べたようにこれらの博物館に展示されているものは質量ともにまだ限られたものではあるが、自らの文化に誇りを持つための有効な手段として活用されることが望まれるし、その発展に向けて研究者の側からも積極的なサポートが行われるべきであろうと思われる（筆者は日本で手に入れることができる限りのユカギール語に関する出版物をネレムノエ村の博物館に寄贈している）。

言語の復興は、それを支える社会全体の復興なくしてはあり得ない。この意味で、狩猟・漁撈を中心とした伝統的な生業が衰退の一途を辿ってきたのはユカギール語の復興にとっては大きな痛手であると言ってよいだろう。これに加え、とりわけソ連崩壊後にはメディア等を通じて（海外からのものを含めた）現代文明の急速な流入があり、伝統的な生活の崩壊にさらに拍車がかかっている。後者のことを指摘した文献を筆者はまだ知らないので、見聞した範囲内で例をあげてみたい。たとえばネレムノエ村では多くの家にカラーテレビがあり、ロシア語番組を通じて現代文化の情報が大量に流入してくる。ビデオもかなりの家庭に備わっており、ロシア語吹き替えのハリウッド映画を若者が皆で見ているという情景は決して稀なものではない。週刊のロシア語新聞もヤクーツクから届けられ、都会との情報格差が次第に縮まってきている。数は多くはないものの海外からの人々も研究者のみならず観光客やジャーナリストとして現地を訪れることがあり、何人か長期滞在する人々も現れている。

ユカギール人の側からの社会的現状への対応は、筆者の知る限りではまだ明確な形では現れていない。注目すべきものとしてユカギール人の住む地域での経済自立化をすすめる動きがあり、コリマ川下流地域では「チャイカ」、コリマ川上流地域では「テキ・オドゥロク」と呼ばれる経済共同体が経済と領土の自立化を進めているという。しかしこ

れらは現実にはサハ共和国（ヤクーチア）からの援助がなければ実際には動けない状況にある。またコリマ川下流地域では、この経済共同体がアンドリューシキノ村近くにユカギール人だけの新しい村「チャイカ」の建設を進めているという。ここでは現在の学校の「多民族状況」を解消し、ユカギール人だけの学校の開設計画もある。もう一つの動きとしては「ユカギール人」意識の創成に向けた「ユカギール民族大会」の開催がある（第1回は1992年にネレムノエ村で、第2回は2000年にヤクーツクで開催）。この民族大会では、たとえば「ユカギール人の社会経済的ならびに民族文化的状況」、「21世紀におけるユカギール人の復興と発展の問題」などの議題で議論が行われた。また前述のヨヘリソンの民族誌（原文は英語）のロシア語訳の作業が進み、1997年に完成した。これによってユカギール人自身が自らの過去を（ロシア語を通じてではあるが）書物から知るきっかけがもたらされたわけであり、今後若い世代を中心としてどのような反応が起こるかが興味深い。またセミヨン・クリロフ（ツンドラ・ユカギール出身）やテキ・オドゥロク（コリマ・ユカギール出身）などの自民族出身の作家も、教育などの場を通じて積極的に紹介され教えられていると聞く。

20世紀における近代文明の流入や、ソ連崩壊後の（海外からの情報も含めた）現代文明の流入はもちろん、現地の切実な社会・経済的状況に突き動かされた結果生じたもので、それ自体を非難する権利は誰にもないであろう。今後追求されるべき課題は、このような状況を観念的に否定し去ろうとするユートピア的発想ではなく、むしろこの状況のもとでいかにユカギール人自身の言語と文化を今後生かしていくかという戦略の積極的追求であろうと思われる。そのときにユカギール語の記述と記録の現地還元を通じた研究者の努力は、その言語と文化の保持に向けた、静かではあるが確実なサポートとなりうる可能性がある。

## 文 献

Donskoj, F. S., G. N. Kurilov et al.

1996 *Problemy vozroždenija isčezajuščix jukagirov*. Jakutsk: Severoved.

遠藤 史

1993 『ユカギール語文法概説』（北大言語学研究報告4）札幌：北海道大学文学部言語学研究室。

2001 「ユカギールの文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』pp. 1058-1064, 東京：三省堂。

池上二良

1989 「東北アジアの土着言語」, 『東北アジアの言語分布の変遷』『民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史』pp.125-161, 東京：山川出版社。

Jochelson, Waldemar

- 1900 *Materialy po izučeniju jukagirskogo jazyka i fol'klora, sobrannye v Kolymskom okruge*. Sankt-Peterburg.
- 1905 Essay on the grammar of the Yukaghir language, *American Anthropologist new series* 7 (2), 369-424.
- 1926 *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*. The Jesup North Pacific expedition 9 / Memoirs of the American Museum of Natural History 13. Leiden: E. J. Brill.

Krejnovič, E. A.

- 1958 *Jukagirskij jazyk*. Moskva and Leningrad: Nauka.
- 1982 *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- 1990 Jukagirskij jazyk. In *Lingvističeskij ènssiklopedičeskij slovar'*, pp.601-602. Moskva: Sovetskaja ènssiklopedija.

Kurilov, G. N.

- 1987 *Bukvar' dlja pervogo klassa jukagirskoj školy*. Jakutsk.
- 1990 *Jukagirsko-russkij slovar'*. Jakutsk.

Levin, M. G., and L. P. Potapov (eds.)

- 1956 *Narody sibiri*. Moskva and Leningrad: Nauka.

宮岡伯人

- 2002 「消滅の危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム」宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』pp. 8-53, 東京：明石書店。

長崎 郁

- 1998 「ユカギール語コリマ方言の民話資料」『ユーラシア言語文化論集』1, pp. 50-66, 千葉：千葉大学ユーラシア言語文化論講座。

Nikolaeva, I. A. et al. (eds.)

- 1989 *Fol'klor jukagirov verxnej kolymy: Xrestomatija*, 2 vols. Jakutsk.

Spiridonov, V. K., and I. A. Nikolaeva

- 1993 *Bukvar' dlja 1 klassa jukagirskix škol (verxnekolymskij dialect)*. Sankt-Peterburg: Prosveščenie.

Vakhtin, Nikolai

- 1992 The Yukagir language in sociolinguistic perspective. In Jerzy Bańczerowski et al. (eds.), *Linguistic and Oriental Studies from Poznań*, vol.1: 47-82. Poznań: Adam Mickiewicz University.